『舞姫は何のために書かれたのか』

一、

私が今回このテーマにした理由は、大きく二つある。

まずは、なぜ、「舞姫」を読んだ誰もが嫌いになるような豊太郎を主人公にし、最後はハッピーエンドで終わらない暗い小説を書いたのか、気になったからだ。

次に、作者の紹介欄を読んでいた時に、作者である森鴎外自身もドイツに留学しており、豊太郎のようにエリートであったことを知り、もしかしたら豊太郎は森鴎外自身のことなのではないか、そうであるとすれば、なぜこのようなつらい過去を振り返り、文章にして世間に公表したのか気になったからだ。何かを伝えるために書かれたに違いないと思った。

以上の理由から、私は、このテーマについて考えることにした。

レポートを書くにあたって森鴎外について調べた結果、やはりこの作品は森鴎外の実体験を元に書かれていて、内容は多少変えられているが、豊太郎は森鴎外自身、エリスにもエリーゼというモデルになった女性がいたことが分かった。

よって、これからは豊太郎＝森鴎外ということを前提として話を進めていきたいと思う。

結論として私は、「舞姫」は、明治時代の非人情的な因習、官僚組織を人々に訴えるために書かれたと考える。

二、

豊太郎は一人っ子であったから、家を継ぐ立場であった。当時、自分の家を背負っていくということは、今よりもはるかに重いことであった。豊太郎にとって、家父長制の確立しつつあった明治期において父親がいないことは大きなハンデキャップであったはずだが、エリート中のエリートになるまで成長した豊太郎は、家だけでなく、日本中の期待も背負わなければならなかった。その重圧は、相当なものであっただろう。

国費での洋行であり、明治維新を果たした日本国政府にとって近代的体制の樹立が早急とされている中で、当時の先進国である西洋諸国に、国内の有望な人材を派遣した中の一人が豊太郎であ

り、そんな豊太郎にとって、ドイツ留学中にあった外国人女性エリスとのスキャンダルは、それらの期待を全て裏切ることになり、出世など自分の将来をも捨てることになる大事件であった。
　自我に目覚めたばかりの豊太郎だったが、当時の国家官僚組織はそれを許さなかった。そして、豊太郎は自分を責めながらも、つらい思いをしてエリスと別れた。
　そのエリスを捨てざるを得なかった明治時代の因習、官僚組織を、豊太郎は恨んだ。豊太郎が世の中を嫌っていたことは、本文中、「世を厭ひ」という文からも分かる。
　先に述べたように、当時のエリートは、なかなか自分の意志で行動ができない状況であった。豊太郎は文中で自分がエリートであることを強調して書いてあるが、それはこのことをアピールするためであろう。
　森鴎外とエリーゼの間で、彼女の妊娠、精神異常ということは実際にはなかったことだが、それが豊太郎とエリスの間で書かれているのは、エリスと別れるつらさをアピールするためである。本文で、豊太郎が相沢と帰国の約束をした時の心の錯乱が書かれていることや、最後まで豊太郎がエリスのことを気にかけていることなどから、エリスと別れるということが、豊太郎にとってどれだけ安易なものではなく、そうせざるを得なかった状況があったのかということが分かる。

　また、本文で豊太郎は相沢のことを恨んでいるが、相沢が、豊太郎が恨んでいる時代の因習、官僚組織の考えをそのまま持ったような、典型的な明治の男であったから、相沢と当時の世の中を重ね合わせて描いている、という風に考えれば、相沢を恨む理由も納得できる。

三、
　これらのことから、私は、「舞姫」は、明治時代の非人情的な因習、官僚組織を人々に訴えるために書かれた、と考える。
おそらく、文学の中で叫ぶことが、森鴎外の世の中へのぎりぎりの地点での反抗であったであろう。

参考…wikipedia、森鴎外と「エリーゼ」-ドイツ・ベルリン-、ケンボックス